

春風た、いとう

●●下

戦後の荒廃した時代に始まった「沖展」が今年で五十二回目を数える。今では県民的大美術工芸展と言っても言い過ぎではあるまい。物があふれ何やらすべてが冷えびえる時代において、歴史的イベントにまで育て

登場し、新しい風を吹き込んでいくのが感じられる。しかし、現代的な様式や新しい形体を採り入れた作品が乏しく、また沖縄という騒がしい「場」を持ちながら、社会的テーマや今日の美術状況にリンクした作品があまりに少ない。常連の先輩たちの作品のマンネリや閉そく感もぬぐえないが、若手作家たちの大いなる奮起が望まれる。「アイエー!」と思わず叫んでしまいう、状況を切り裂き、時代を意

第52回 OKITEN

沖展

上げた先人たちの芸術文化に対する熱い思いが、崇高感すら帯びてくる。

まず絵画から足を運ぶ。毎年欠かさず見ているわけではないが、時代と共に若い作家たちが



識した大胆な発想の芸術作品を見てみたい。

絵画に比べて点数も少なく地

上原 誠勇

彫刻、陶芸に現代的手法
望まれる若手作家の奮起

味な存在の彫刻は、現代的な手法と空間を取り込んだ作品もあったり、変化が見られて楽しみになっている。工芸部門のガラスの発展ぶりも見逃せない。伝統の技術に裏打ちされた漆芸や陶芸のコーナーも年々モダンな作品が増え期待している。近年作

家が増えて、その活動が盛んになっている木工芸も募集の枠に入れてはどうだろうか。現代の木工芸も見てみたいと思う。以前に比べ、立派な体育館での開催は確かに便利になった。照明も明るく大勢の人が行き交うことが可能な大展示会場だ。しかし、個々の作品世界を十分に引き出している展示空間とは決して言い難い。緊張感に欠け、大味な空間を禁じ得ない。ややもすると、沖縄唯一の歴史を刻む芸術文化イベントが、派手なのほりが乱れはためく「県民美術工芸品大産業まつり」のにぎわいになりかねない。県内の不備な美術環境からやむを得ないとしても、やはり美術工芸作品の展示会は、それらを展示するにふさわしい独立した空間、すなわち「美術館」で見たい。二十一世紀の「沖展」はぜひそうであってほしい。

(画廊沖縄代表)